

Asia Indicators

発表日: 2023 年5月2日(火)

韓国、4月インフレ率は14ヶ月ぶりの水準に鈍化(Asia Weekly(4/28~5/2))

～インフレ鈍化もコアインフレは高止まり、世界経済の減速懸念が輸出の重石となる動きも～

第一生命経済研究所 経済調査部

主席エコノミスト 西濱 徹(Tel:050-5474-7495)

○経済指標の振り返り

発表日	指標、イベントなど	結果	コンセンサス	前回
4/28(金)	(台湾)1-3月実質GDP(前年比・速報値)	▲3.02%	▲1.25%	▲0.41%
4/30(日)	(中国)4月製造業PMI	49.2	51.4	51.9
	4月非製造業PMI	56.4	--	58.2
5/1(月)	(韓国)4月輸出(前年比)	▲14.2%	▲13.5%	▲13.6%
	4月輸入(前年比)	▲13.3%	▲10.6%	▲6.4%
5/2(火)	(韓国)4月消費者物価(前年比)	+3.7%	+3.7%	+4.2%
	(インドネシア)4月消費者物価(前年比)	+4.33%	+4.39%	+4.97%
	(豪州)金融政策委員会(政策金利)	3.85%	3.60%	3.60%

(注) コンセンサスは Bloomberg 及び THOMSON REUTERS 調査。灰色で囲んでいる指標は本レポートで解説を行っています。

[韓国]～インフレ率は14ヶ月ぶりの伸びに鈍化も、幅広いインフレの動きを受けてコアインフレ率は高止まり～

1日に発表された4月の輸出額は前年同月比▲14.2%と7ヶ月連続で前年を下回る伸びとなり、前月(同▲13.6%)からマイナス幅も拡大している。当研究所が試算した季節調整値に基づく前月比も2ヶ月連続で減少しており、中期的な基調も減少傾向で推移するなど頭打ちの動きを強めている。国別では、最大の輸出相手である中国向けのほか、欧米など主要国向けも幅広く下振れする展開が続いており、世界経済の減速懸念の高まりが輸出の足かせとなっている。財別でも、主力の輸出財である半導体をはじめとする電子部品関連のほか、石油製品をはじめとする化学製品関連の輸出も下振れする一方、自動車関連の輸出は比較的堅調に推移している。一方の輸入額は前年同月比▲13.3%と2ヶ月連続で前年を下回る伸びとなり、前月(同▲6.4%)からマイナス幅も拡大している。前月比も2ヶ月連続で減少しており、中期的な基調も減少傾向で推移するなど輸出同様に頭打ちの動きを強めている。輸出の低迷を受けて素材、及び部材関連の需要に下押し圧力が掛かっているほか、商品市況の調整の動きも輸入額を下押ししている。結果、貿易収支は▲26.18億ドルと前月(▲46.32億ドル)から赤字幅は縮小している。

2日に発表された4月の消費者物価は前年同月比+3.7%となり、前月(同+4.2%)から一段と鈍化して14ヶ月ぶりの伸びとなった。ただし、前月比は+0.22%と前月(同+0.16%)から上昇ペースが加速しているものの、生鮮品を中心とする食料品価格は下落しており、原油をはじめとするエネルギー商品価格の調整の動きを反映してエネルギー価格も落ち着いた推移が続くなど、生活必需品のインフレ圧力が後退している。なお、食料品とエネルギーを除いたコアインフレ率は前年同月比+4.0%と前月(同+4.0%)から3ヶ月連続の横這いで推移しており、インフレ率を上回る伸びとなっている。前月比も+

0.32%と前月（同+0.20%）から上昇ペースが加速しており、過去のエネルギー価格の上昇に伴う輸送コストの上振れに加え、国際金融市場における通貨ウォン安を受けた輸入インフレ圧力の高まりを反映して幅広く財価格に押し上げ圧力が掛かっている上、経済活動の正常化の進展によりサービス物価にも押し上げ圧力が掛かるなど、全般的にインフレ圧力が強まる動きがうかがえる。

図1 KR 貿易動向の推移

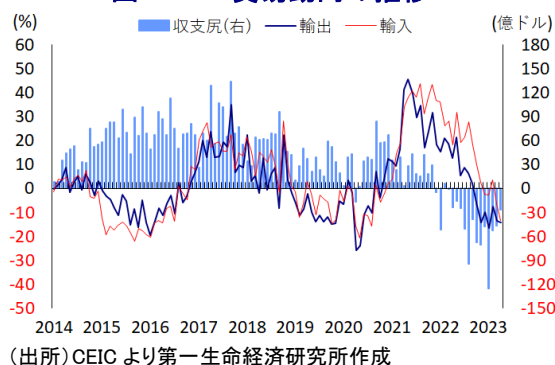
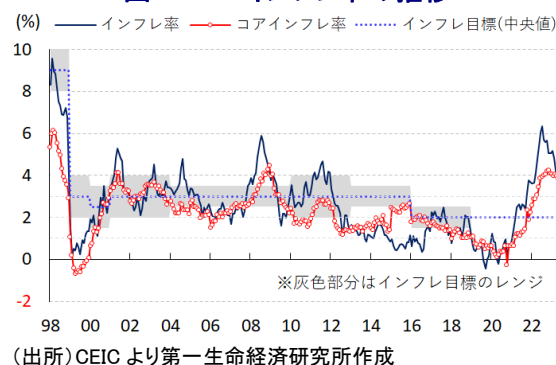


図2 KR インフレ率の推移



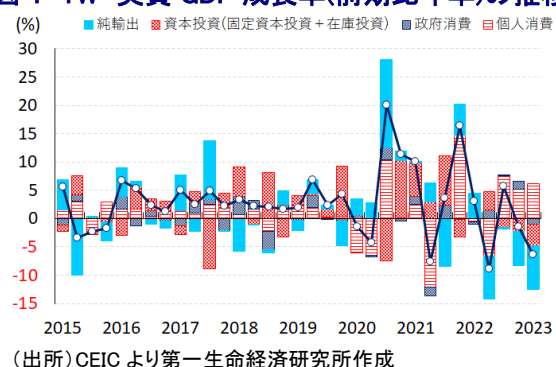
[台湾]～世界経済の減速懸念が重石となりテクニカル・リセッション入り、先行きの景気にも下押し要因が山積～

先月 28 日に発表された 1-3 月の実質 GDP 成長率（速報値）は前年同期比▲3.02%と 2 四半期連続のマイナス成長となり、前期（同▲0.41%）からマイナス幅も拡大している。前期比年率ベースの成長率も▲6.37%と前期（同▲1.46%）から 2 四半期連続のマイナス成長となるなど、テクニカル・リセッションに陥っている。世界経済の減速懸念の高まりを反映して、欧米など主要国向けのみならず、中国本土向けも含めて全般的に輸出に下押し圧力が掛かる展開が続いていることに加え、中銀による金融引き締めを受けて企業部門による設備投資需要も後退して固定資本投資に下押し圧力が掛かる動きがみられる。一方、物価高と金利高の共存にも拘らず、感染一服による経済活動の正常化によるペントアップ・デマンドの発現に加え、サービス関連を中心とする雇用の底堅さを反映して家計消費は底堅く推移している。ただし、中銀は 3 月の定例会合においても 5 会合連続で政策金利を引き上げるなど一段の金融引き締めに動く姿勢をみせるなか、世界経済を巡る不透明感の高まりが外需関連を中心に雇用の重石となる動きもみられるなど、先行きの景気に一段と下押し圧力が掛かる展開も予想される。

図3 TW 実質 GDP(季調値)と成長率の推移



図4 TW 実質 GDP 成長率(前期比年率)の推移

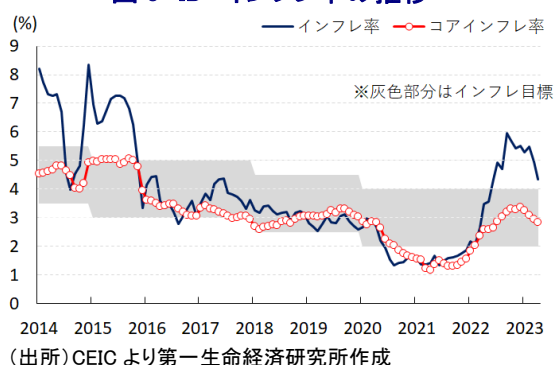


[インドネシア]～インフレ率は 11 ヶ月ぶりの伸びに鈍化も、生活必需品のみならず幅広くインフレ圧力は残る～

2 日に発表された 4 月の消費者物価は前年同月比+4.33%となり、前月（同+4.97%）から鈍化して

11ヶ月ぶりの伸びとなっている。ただし、前月比は+0.33%と前月（同+0.18%）から上昇ペースが加速しており、原油をはじめとするエネルギー資源価格の調整の動きを反映してエネルギー価格は落ち着いた推移をみせる一方、生鮮品を中心とする食料品価格は上昇の動きが続くなど、生活必需品を巡る物価の動きはまちまちの状況にある。また、食料品とエネルギーを除いたコアインフレ率は前年同月比+2.83%と前月（同+2.94%）から伸びが鈍化しており、中銀の定めるインフレ目標（ $3 \pm 1\%$ ）の範囲内で推移する展開が続いている。ただし、前月比は+0.25%と前月（同+0.16%）から上昇ペースが加速しており、輸送コストの上昇を反映して幅広く財価格に押し上げ圧力が掛かる動きがみられるほか、経済活動の正常化を受けてサービス物価にも上昇圧力が掛かる動きが確認されるなど、幅広くインフレ圧力が強まっている様子がうかがえる。

図 5 ID インフレ率の推移



以 上

本資料は情報提供を目的として作成されたものであり、投資勧誘を目的としたものではありません。作成時点で、第一生命経済研究所経済調査部が信ずるに足ると判断した情報に基づき作成していますが、その正確性、完全性に対する責任は負いません。見通しは予告なく変更されることがあります。また、記載された内容は、第一生命保険ないしはその関連会社の投資方針と常に整合的であるとは限りません。